

これら・それら・あれら ——指示詞複数形の「指示」について——

竹内 直也

[キーワード：① 指示詞 ② 複数形 ③ 個別性・全体性
④ 人指示・事物指示 ⑤ 接尾辞「～ら」]

1. はじめに

「コソア」で表される日本語の指示詞は複数個の指示物をまとめて指示することも可能である。

(1) (3個のリンゴを見て) 「このリンゴください」

(1)のような例では、「この」で指示されるものは、「1つのリンゴ」であっても「3つすべて」であっても「この」で表すことができる。

しかし、日本語の指示体系には複数を表す接尾辞「～ら」と結合して、「これら・それら・あれら」のように複数形指示を表す形があり、(1)の例は(2)のようにあらわせる。

(2) (3個のリンゴを見て) 「これらのリンゴは青森産です」

だが、指示詞複数形はもともと指示詞の体系から生まれたものであるが、その性質はその他の指示詞と異なったふるまいを見せ、さらにその使用にはいくつかの制限があり、指示詞複数形で表されたものは(3)のようにその他の指示語彙で置き換えることが可能となっている。

(3) (3個のリンゴを見て)

「「?これらの／この」 リンゴはどれもおいしそう」

本稿ではその用例を見ながら、「これら・それら・あれら」が表す指示条件を明らかにしていく¹⁾。また、その制限の一つとして考えられる、指示詞が指し示す指示物の問題についても言及していく。

2. 先行研究と指示詞複数形の体系

2. 1 指示詞複数形について

指示詞複数形となるものは「これ→これら」、「この→これらの」、「こいつ→こいつら」のように、指示詞に複数の接尾辞「～ら」を接続した形式しか存在しない。指示詞複数形の体系を表にすると、<表1>のようになる。なお、ここでは不定・疑問を表す「ド」の系統は除外する。

<表1>

	近称	中称	遠称
もの・人	これら	それら	?あれら
もの	こいつら	そいつら	あいつら

表より明らかとなるが、指示詞複数形となる際、「コソア」の体系は守られる。「あれら」については「?」がつけてあるが、その点については3. 2で改めて触れる。

2. 2 指示詞複数形の先行研究とその検討

2. 2. 1 金水・木村・田窪 (1989) について

指示詞研究は非常に多くあるが、その中で指示詞複数形について触れたものはあまりなく、体系的に説明がなされているものは金水・木村・田窪 (1989) にあられる。金水・木村・田窪 (1989) では、指示詞の単複についてまとめており、「これら・それら・あれら」使用条件は(4)のように三点にまとめることができる(86—88頁)。

(4) a : 書き言葉が中心で、話し言葉にはあまり用いられない。

b : 名詞と動詞の論理的な関係を表すのに用いられる。

c : 1 ; 指し示される対象をひとまとめに処理したり、全体につい

て状態・特徴を規定するときには、単数・複数を区別する必要がない。

2；一つ一つに別の処理が必要なことが明らかな場合は単数と複数を区別する必要がある。

ここで言われる a の条件は、

(5)「修士論文や進路や将来のこととか不安が多いよ。これらのことで頭が一杯で、恋愛について考える余裕は無い。」

(6)この机にたくさんのライターがあるけど、これらの中から一つだけ持っていったいいよ。

のように話しことばでも用いることができる。このように見ていくと、「文脈指示（照応）の形でしか用いることができない」と表す方が適当に思われるが、現場指示（直示）の例もわずかながら存在する。

(7) (3枚の写真を見せて)

「これらの三人のうち、フィギュアスケート世界選手権で一位となった人は誰でしょう」（「アタック25」2004年4月25日放送）

このような例があるため、「文脈指示の形で用いられることがほとんどである」と言う方がより適切であると思われる。

ここで注目したいのは c であり、「個別に処理するときには単数複数を区別する必要があるが、ひとまとめとするときには単数・複数は区別されない」という点である。たしかに、複数形を用いるときは個別性が際立つ。しかし、「ひとまとめ」とするときには果たして単数複数が区別されないのだろうか。この点についてみる。

2. 2. 2 個別処理が必要な場合

まず個別処理が必要と思われる例について検討してみる。

(8) 粗暴に振る舞いたいと思う男の感覚と、佳世を慈しむ心。 {それら / ? それ} がない交ぜとなったまま、山を昇りつめてゆく。（『愛の領分』²¹）

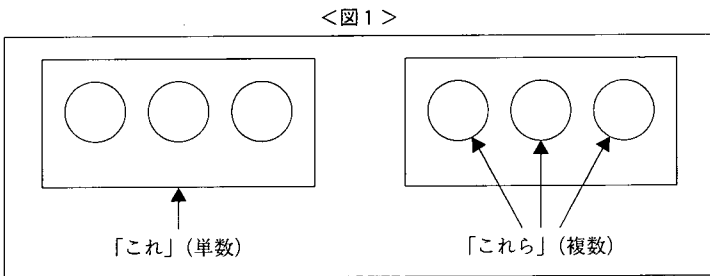
(9) 彼女は猫を飼いだした。それも そこらで拾ってきた捨猫で、その数

も三匹で、これら／これ がやがて仔猫をうんだ。(『榆家の人びと』)

これらの例は具体的な数が明らかになっている例である。(8)の場合、「粗暴に振る舞いたいと思う男の感覚」と、「佳世を慈しむ心」という心の相反する感情が一人の人間の中で混ざっているもので、ここで「それ」を用いると、その相反する感情がすでにひとまとめとなってしまうように感じられる。そのため、相反する感情がひとまとめと捉えることとなり、ここで「それ」を用いるのは不自然である。

(9)の場合、「これ」を用いると「子供を産んだ猫は一匹かそれ以上」という可能性を持つこととなる。しかし、「これ」を用いた場合、「三匹とも子猫を産んだ」という解釈がなされるのは、「これ」という指示語が「猫三匹」をひとまとめとして捉えているためであると考えられる。ここで「これら」が用いられているのは、その猫三匹を個別に注目しているためであると考えられる。

(8) (9) で見てきたことを図示すると、<図1>のようになる。



この図より示されることは、「これ」と「これら」の指示方法の違いである。「これ」で指し示すときには、その指示先をひとまとめにして、そのひとまとめにしたものを「これ」で指し示す。ここで「これら」とすると、その一つ一つのごとを個別に指し示すこととなる。ここから、単数形にするとその集合という捉え方をする「全体性」をもち、複数形を用いるとその一つ一つに注目する「個別性」を持つと考えられる。

このように考えると、「指し示される対象をひとまとめに処理したり、全体について状態・特徴を規定するときには、単数・複数を区別する必要がない」という(4c-1)のような条件であっても、単数・複数違いによってその指示性質は異なるのである。

仮に似たような条件で、

(10) 三人の姉妹がいた。彼女ら／彼女が男の子を産んだ。

とした場合、「三人とも男の子を産んだ」という意味では「彼女」では不可能となる。つまり、ここで複数形を用いることは、そこで指し示される複数のものごとをひとまとめとせず、その一つ一つが指示詞以後の条件を同一に持つと言うことになる。ここから、複数形を用いるときには「個別性」を有することとなり、単数では「全体性」となると考えることができる³⁾。

2. 2. 3 全体性を有する場合

それでは、「全体性」を有するときは単複の区別がなされないのだろうか。指示詞複数形を用いて、ひとまとめに処理されている場合を見ていく。

(11) 黄金の寢室のドアの内側に衣装ケースほどの大きさのヴィトンのトランクが五つ並べられている。それら／それは杏子がこのバンコクで暮らした生活の全てと言ってもいい。(『サヨナライツカ』)

(12) 授業料やら書籍代やら、相当まとまった金が父親から送られてあったので、それら／それを旅行費用に当てれば、学生としては贅沢な旅行ができた。(『あすなる物語』)

(11)は「ヴィトンのトランク5つ」をまとめて捉えても個別を検討してもそこに現われる内容の差異は一見現われない。そのため、ここでは「これら」と「これ」の区別は一応なされない。しかし、これは、その場で現われるものがものであり、その中にトランクの大きさなどの具体的な個別の違いがコンテキストから見出せないためであると考えられる。たとえば、後半のコンテキストを少し変えてみる。

(11') ヴィトンシのトランクが五つある。 それら／?それ は、更に大きなカバンに詰められて一つになっていた。

このようにしたとき、ひとまとめとされているが、ここで「それ」を用いるより、「それら」を用いる方が自然に感じる。ここで、ひとまとめにされていても、単数複数の区別がなされないわけではないのではないのかと考えることができる。

(12) の例を見ていこう。ここでは「授業料やら書籍代やら」という限定がついているため、「それら」と「それ」の両方可能のように見える。しかし、「相当まとまった金」というものの具体的な中身が問われなければ、そこに現われるのは「全体性」である。仮に、

(12') 相当まとまった金が父親から送られてあったので、 ?それら／それ を旅行費用に当てれば、学生としては贅沢な旅行ができた。

のように、「授業料やら書籍代やら」を除くとひとまとめとなった「全体性」のみの文となるが、ここで「それら」を用いるのは決して自然ではない。ここから、やはり「全体性」が問われるときは、「それ」と単数で表し、その中に「個別性」を見て取れる場合は「それら」と複数で表す」という方が正確に思われる。

また、(13) のように、その解釈によって指示先が異なる場合もある。(13) ステレオからは世にも悲しい音楽が流れていた。 はりさけるようなボーカルと、美しいギターの色と、絶望を掻いた曲調と。 それら／それ は曇った窓に水がどンドン流れて外の景色が虹色に見える様子が奇妙に似合っていて、胸をしめつけられた。(『虹』)

この解釈は「それら」を用いた場合、「世にも悲しい音楽」の具体的な「はりさけるようなボーカル……」が指示先に入り、その具体的な説明から個別性を有していると考えることができる。また、ここで「それ」を用いると、あくまで指し示すものは「世にも悲しい音楽」でしかなく、その後続く「はりさけるようなボーカル……」はあくまで説明であり、そこを指示先と捉えることはできない。このように捉えると、ここでも

「個別性」と「全体性」の区別を見て取ることができ、(4c-1)で述べられる、「指し示される対象をひとまとめに処理したり、全体について状態・特徴を規定するときには、単数・複数を区別する必要がない」ということはなく、やはり、ひとまとめに処理したり、全体についての状態・特徴を規定するときにも、そこで「個別性」と「全体性」が問われ、その解釈・判断によって使い分けがなされていると考えるべきである。

以上のようにcの条件について言及してみたが、ここでの条件は「二つ以上の指示先があり、その指示先が個別性を有するときに複数形を用い、指示先が全体性を有するときは単数形で表す」と置き換える方が分かりやすいと思われる。

ここまで指示詞複数形を用いるときの条件をまとめてみた。しかし、指示詞複数形は「このような」「こういった」などの置き換え例が存在するため、指示詞複数形が用いられる場合は、上のような条件を満たしていても必ず用いられるわけではない。以上をふまえて、その個別の使用パターンについてみていこう。

3. 「これら・それら・あれら」の使用パターン

指示詞複数形の置き換え例は様々ある。「これら」の場合は、主として「これ」で置き換えられるが、その他「このような」、「こうした」、「こういう (いった)」といった形式があるが、ここではどのような場合でも置き換えることができる「これ・この」との置き換えに絞って考察を行う。

まず「これら・それら」とまとめて見て、その後指示詞の性質とも趣を異とする「あれら」のみを個別に見ていくこととする。

3. 1 「これら・それら」

「これら・それら」の性質は共通している。「これら」の例から具体的に検証し、その性質が「それら」も同一であることを見ていくこととする。

3. 1. 1 「これら」

まず「これら」の例である。

(14) わが國と貴國とは太青洋に間に挟んだ世界の二大強国である。太青洋は、永遠に両国の緩衝地帯である。太青洋のあるお蔭で、これら／この二大強国は、永遠に衝突を回避できるであろう。(『二〇〇〇年戦争』)

(15) 堀木のように、虚栄のモダニティから、それを自称する者もあり、また自分のように、ただ非合法の匂いが気にいって、そこに坐り込んでいる者もあり、もしもこれらの／この実体が、マルキシズムの真の信奉者に見破られたら、堀木も自分も、烈火の如く怒られ、卑劣なる裏切者として、たちどころに追い払われた事でしょう。(『人間失格』)

(16) 外を覗くと、うす暗いプラツトフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これら／これはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。(『蜜柑』)

これらの例は置き換えが一つしかない例である。ここでの置き換え例のうち「この・これ」のどれが選ばれるのかは前後のコンテキストの問題であるのでここでは割愛するが、ここで注目するのは、全ての場合において置き換えが可能であるということである。

また、(4 b) でも触れられているが、指示詞複数形は論説文などの論理的な文章によく現われるが、そのような場合においても同様である。

(17) これらの／この例は置き換えが一つしかない例である。(7行上

の文章)

(18) ドイツの中産以上の家庭には通常、ヒンデンブルグやルーデンドルフの回想録は所有されており、広く読まれている。これらの／？この 図書は立派な戦史書である。(『最終戦争論』)

(19) 例えば今日我々が「ア」と読んでいる中でも「阿」「婀」「鞅」「安」のような色々な文字があつて、これらの／？この 文字を悉く我々は「ア」と読んでいる。(『古代国語の音韻に就いて』)

このように、論理的な文章においても、一つ一つの例を指し示す場合には「これら」を用いるが、たとえそのような場合においても置き換えることは可能となる。このように見ていくと、具体的に個別認識されないもの、つまり先に記した「全体性・個別性」というものが具体的に意識されにくいときには、置き換えたときの意味をカバーできる⁴⁾。

それでは、置き換えたときに意味が変わる例を見ていく。

(20) 彼女は猫を飼いだした。それもそこで拾ってきた捨猫で、その数も三匹で、これら／これ がやがて仔猫をうんだ。(『榆家の人びと』) (= (9))

(21) 「向こうに着いたらこれで悶着ものだけ。田川の嘯め、あいつ、一味憎すらずにおくまいて」
「因業な生まれだなあ」
「なんでも正面からぶっ突かって、いさくさいわせず決めてしまうほかはないよ」

などと彼らは戯談ぶった口調で親身な心持ちをいい現わした。事務長は眉も動かさずに、机によりかかって黙っていた。葉子は これらの／？この 言葉からそこに居合わす人々の性質や傾向を読み取ろうとしていた。(『或る女』前編)

(20) の場合は、先にも記したが、「全体性」を見るか、「個別性」をみるか、という意味的相違が見られ、(21) の場合は、先の会話の全てと見るか、その中の一つの会話と見るか、という相違を見ることができ

る。このように、両者の使い分けで意味の相違が現れるのは、その中に全体性を見ることができるとか、それとも一つ一つの事象に着目するかという個別性の違いを抽出できるときのみである。しかし、こうした中でも、「これら」のみでしか表せない例が存在するわけではなく、むしろ「これら」を用いる例の方が極めて限られた条件のもとでしか用いることができない点に注目すべきである。

なお、「これら」は論理的な文章では現われるが、現代の小説などではほとんど現われない。現代「これら」が使われる場合は他に、規約書などに見られる。

(22)①当行および当行がオンライン自動入金機の共同利用による現金預入業務を提携した金融機関等（以下「入金提携先」といいます。）の自動入金機（自動入出金機を含みます。以下「入金機」といいます。）を使用して普通預金、貯蓄預金（以下「これら／これ」を「預金」といいます。）に預入れる場合。（三井住友銀行 ATM 規約）
これも論理的な文章の一つであり、現代では論理的な文章のみの使用例以外あまり見られない点からも、論理的の一つ一つに注目するとき以外で指示詞複数形を用いることが困難であると理解でき、その困難さから他の置き換え例が生まれ、その結果置き換え例で用いることとの相違が薄れているとみなすことが出来るのである。

3. 1. 2 「それら」

3. 1. 1 で見た性質は、「それら」の場合も同様である。以下、「それら」について見ていく。

(23)授業料やら書籍代やら、相当まとまった金が父親から送られてあったので、「それら／それ」を旅行費用に当てれば、学生としては贅沢な旅行ができた。（＝(12)）（『あすなる物語』）

(24)夢のようだ、まるで虹を見ているようだ、と私は思った。七つの色がみんなこの世界には入っている。そして「それら／それ」がにじむように、きれいなリボンみたいに帯になって細くゆらめきながら

広がってゆくようだ。(『虹』)

(25) キャプテン EO に蹴られたり触られたりいろいろ言われたりして、一円玉を胸に乗つけられ、お金は盗られてなかったが、結局ラブホテルの代金も払わされた。 指輪を買えなかったことで、それらの／その 悔しさと悲しさと怒りは何千倍にもなった。(『ラブ&ポップ』)

(26) それからまた放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれども それら／それ は見えたと思うと、たちまち濛々とした霧の中に隠れてしまうのです。(『河童』)

(23)(24) は個別性を見出せないので、両者の使い分けについての意味の相違は見出せない。(25)(26) は置き換えることによって個別性に注目するか、全体に注目するかの相違が見出せる。このような点でも「これら」との相違点は見出せない。その指示的性質では「これ・それ」の違いのみで、「～ら」となることでの特異性は「これら・それら」は同様であるとみなすことができる。

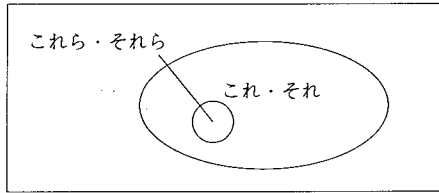
なお、「これら」との相違点としては、論理的な文章では少ないが、小説などでは「それら」の使用が多く、その使用は現代の小説でも多い点⁹⁾、また、具体的な事物がなく、漠然としたものでも指示詞複数形で表すことがある点が挙げられる。

(27) バブル期、許されない「相続税対策」をだましの口実に使い、まづば銀行は違法な過剰貸付を、この町屋で多数行いました。現在では それらの／その ほとんどが不良債権と化し、たった一通の知らせで庶民が生涯をかけて築きあげた土地・建物を競売にかけるといふ、非道な手口がまかり通っています。(『波の上の魔術師』)

(28) さまざまなライセンスと それら／それ についての解説 (google) しかし、このような違いがあっても、「これら・それら」は「個別性が全体性か」ということでまとめられる。つまり、「これら・それら」の使用は「個別性」が問われるが、その解釈はかなり限られたものであ

り、それのみでしか指し示すことが出来ない例は現代語の例にはほぼ存在しないと考えられる。同様に、「これ・それ」などの置き換え例はそれだけ指示範囲が広いものであるとみることができるのである。これらの関係は<図2>のようになっているものと考えられるのである。

<図2>



3. 2 「あれら」

ここで「あれら」について言及する。「あれら」の用例はかなり限定されていて、用いられる例でも、適当なものであるかどうかはその使用者の解釈によってゆれるものである。

(29)「鯨と象の頭蓋骨は地下の倉庫に置いてあるですよ。御存じのように、あれら／あれ はかなりの場所をとりますからな」と老人は言った。(『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

(30)「僕の部屋に植木鉢が4つある。僕の出張中、あれら／あれ に水をやっておいてくれないかな？」

(31)フードコーディネーターさんやプロの調理人さん達が料理を作って、写真系の場合は、食系撮影専門のカメラマンさんがシャッターを押してる訳ですが、あれらの／あの 料理。実は、普通に食べる時と違って、撮影用に色々な手が加えられているんです。(yahoo! Japan)

これらの例は「あれら／あれ」両者の使用が可能であるが、より自然に聞こえるものは後者のほうである。このように、「あれら」の場合は、どちらも使用可能と考えるより、「あれら」を用いることが不自然になり、果たして「あれら」を用いることができるのか、という問題が生ま

れてくる。

こうした問題については、談話管理理論の観点から説明がなされる⁶⁾。田窪・金水（1996）では、ア系列指示詞は文脈指示には現われにくい、としている。指示詞複数形は文脈指示が多い点から、「あれら」は現われにくいと考えられる。しかし、「あれら」の用例は決して少ないわけではない⁷⁾。ここでは「あれら」の現われ方について言及する必要がある。

あれらの使用に関しては、先の三例を見ても、2節で見たような「個別性」「全体性」という点から考えても、この置き換えによる違いを見出すことができない。また、「あれら」は、先の「これら・それら」とは異なり、複数形を用いても個別性が際立つわけではない。

(32) 芸術家は芸術のみしか信じないでいいのです。芸術量の少ないものが××や×××に行けばいいのです。お母さん、あなたはそんなに芸術家でいながら何をくよくよと迷っているのです。(然し茲にはつきり云って置くことは、××を打ち壊せということではないのです。良き社会人としての生活には、××は立派な意義や生命を持っているのです。×××の意義もそこにあるのです。すべての人の幸福のために戦うと云うところに あれら／あれ の意義はあるのです) (『母子叙情』)

(33) ヨハンは又ジブシイのこの仲間らが季節のまにまに、ヨーロッパの各地を流れ廻ってゆく生涯のことを話し、他の一切のことを考えず、ヴァイオリンのみを抱きかかえて死んで行く、彼等の宿命の愁いや 喜びを話したりした。

「あれら／あれ は音楽そのものですよ。本格のものもやれるのですが、やはり譜にあまり捉われてはおりません。そんなもの面白くないのでありましょう」 (『罌粟の中』)

(34) 各地に生産者組合とか出荷組合とかいうものがある。 あれら／あれ はどのような組織で、どのように運用されているのであろう。

(『生活の探究』)

こうした例の問題は指示先の問題から生まれてくるものである。(32)は「芸術家」を「あれら」で指し示しているが、「芸術家という人々」という解釈をしても、「あれら」を用いるのはやや不自然に感じる。(33)は「ジプシーの放浪人生の愁いや歎び」を指し示しているが、「ジプシーの人々」と解釈してもやや不自然である。(34)の用例が「生産組合や出荷組合」という指示が分かり、この例の中では比較的自然而であるが、ここでも本来「これら／これ」を用いる方が自然で、この際にア系列の指示詞を用いることができるかという疑問が残る。このように、「あれら」を用いる用例はきわめて不自然な用例が非常に多くみられる。

こうした不自然な用例が生じる理由として、英語の“those”などの訳語となっている「あれら」の存在がある。

(35) No, they're not apples. Those are pears. (違うよ、それらはリンゴ達じゃないよ。あれらは梨達だよ) (<http://www2.edu.dhc.co.jp/column/084.html>)

(36) Queste opere sono tanto noiose quanto quelle. (これらのオペラはあれらと同じくらい退屈だ) (http://www.japanitalytravel.com/ye_lesson/lesson.html)

(37) Those toys are interesting. (あれらは面白いおもちゃです) (google)

このように、外国語の訳語としては「あれら」は用いられ、英語の教科書、外国語の会話集などでは「あれら」はよく見られる翻訳調の日本語である。(35)(36)の用例は「それら—あれら」、「これら—あれら」という対応から生まれていると考えられるが、これらの日本語の不自然さは「あれら」という指示語を用いることによる翻訳語口調によるものであるとみることができる。

以上のように、「あれら」は実例がいくつか存在するが、これらの用例は全てその他の指示語彙で置き換えても意味は変わらないし、そうした方がより自然に感じる例が多い。これは文脈指示であるほかに、日本

語の指示詞のシステムも関係している。ア系列指示詞について田窪・金水（1996）は「D-領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識」（72頁）としている。この「直接経験」という枠組みを考えると、自分の考える相手の直接経験を複数まで共有していると確信するのは難しい。そのため、「あれら」が出てこないのも納得がいく。つまり「あれら」があまり現れないのは、文脈指示の性質のほかに「聞き手との共有知識を複数まで認知することは難しいため」と考えられるのである。このように、「あれら」の用例が自然に現れないことを見ても、「これら・それら・あれら」は指示詞コソアの体系から外れていると見ることができるだろう。

3. 3 置き換え例から見えてくること

この節では、指示詞複数形が「個別性」という指示領域を持ちながらも、その解釈は限られたものしか指し示すことができず、その領域は他の指示語彙がカバーしていること、そして、「あれら」は現代日本語の指示体系からは外れてしまったものである点について見てきた。ここで、このような語彙がなぜ存在するのかという問題が生まれる。最後に複数を示す接尾辞「～ら」という点に注目して、指示詞複数形の特異性を別の視点で触れてみる。

4. ヒトかモノか—指示の系列

ここで「これら・それら・（あれら）」の「～ら」について見ていく。

現代日本語の複数を表す接尾辞は「～たち」「～がた」「～ら」がある。これらは人称名詞の接続のみである。ここから人称を対応させると、〈表2〉のように表せる。

<表2>

	—たち	—がた	—ら
一人称 (自称)	私たち	×	ほくら
二人称 (対称)	あなたたち	あなたがた	あんたら
三人称 (他称)	×	×	かれら

(38) 私たち / *私がた / 僕ら がやります。

(39) あなたたち / あなたがた / あんたら がやりなさい。

(40) ??彼たち / *彼がた / 彼ら がやりました。

また、「～たち」は (41) のように人以外のものにも接続できるが、これは擬人化した用法と考える方が自然である。

(41) 森の木々たちに囲まれていると生き返ったような気分になる。

このように見ると、三人称で用いることが出来るものとしては、「～ら」のみである。指示詞は三人称のものと考えられることができるので、こうした点から見ても、「これたち・これがた」が現れないのが理解できる⁸⁾。そして、「これら」が人称の接尾辞を持ちながら、なぜ人称ではなくものを指し示す語彙となっているのか、という疑問が浮かんでくる。

ここで考えられるのは人を指し示す指示詞「こいつ・そいつ・あいつ」である。この期にも「～ら」と接続して「こいつら・そいつら・あいつら」という複数形が存在する。

(42) 行員は携帯電話を抜いて応援を呼んだ。しばらくして別の行員が警察官といっしょに会議室にあらわれる。中年の警官は老人たちから事情をきき、なんとかなだめようとしていた。老人たちの怒りはなかなか収まらなかった。逆に こいつら / ??こいつ をしょっぴけと警官に詰めよっている。(『波の上の魔術師』)

(43) 「心配しなくても大丈夫だ。そいつは誰にもなにもいわん。おかしなことをして元締を裏切れば、二度と上野のお山に帰れなくなる。ほかにいくところなんてねえんだ。 そいつら / ??そいつ はうちのやつらより口は固い」(『波の上の魔術師』)

(44)ある時、つい調子に乗って、かわしたついでにあかんべえってしちゃったの。そしたら、「あいつら／??あいつ」、本気で怒り出して、わたしの髪をひつつかんで奥にひきずってった。(google)

「こいつ・そいつ・あいつ」自体、下品な言い方となる場合が多く「こいつら・そいつら・あいつら」という例自体、より品の悪い言い方となることが多いが、人を指し示す指示語の複数形は「こいつら・そいつら・あいつら」が存在する。このように、人を指し示す指示語が他に存在するため、「これ・それ・あれ」では人を指し示すことはあっても、「これら・それら・あれら」では人を指し示す用例はほとんど存在しない。

しかし、それなら何故人称の接尾辞「～ら」が接続しているのか、という問題が残る。これは通時的な問題があるので、ここでは軽く触れる程度にする⁹⁾が、本来の「これら・それら・あれら」は主に人を指し示す指示語彙として中古（10世紀ごろ）に成立したものである。それに対して「こいつ・そいつ・あいつ」は中世の成立であり、「こいつら・そいつら・あいつら」は近世の成立である。ここから「これら・それら・あれら」と「こいつら・そいつら・あいつら」の使い分けがおこったものと考えられる¹⁰⁾。

しかし、「～ら」の形式は人称形式として未だ残っている。「～ら」の形式をもちながら、「これら・それら・あれら」はその指示先に人をとる用法は消えてしまっている。

「これら・それら・あれら」は形としてはヒトを指し示す「人指示」だが、実質はモノを指し示す「事物指示」であるというズレが生じている。このように、「これら・それら・あれら」は通時的変遷をたどって用法が変化したため、形と用法の違いが生じたものと考えられる。

5. まとめ

以上のように「これら・それら・あれら」を見てきた。結論は以下のとおりである。

- 1: 「これら・それら」が用いられる場合は、個別性に注目するときである。また、単数形と複数形の区別については単数形にすると「全体性」を見ていることとなり、複数形では「個別性」を見ていることとなる。両者は同等に用いられることはない。
- 2: 指示詞複数形が「個別性」という指示領域を持ちながらも、その領域解釈は限られたものであり、ごく一部しか指し示すことができず、その領域は他の指示語彙がカバーしている。
- 3: 「あれら」は現代語では「あれ／あの」との置き換えによる意味的相違が全く生じない。これは文脈指示を制限する「ア系指示」の性質によるものと考えられる。
- 4: 接尾辞「～ら」と言う点に注目すると、通時的に「これら・それら・あれら」がヒトを指し示すものからモノを指し示すものに変化したと考えることができる。

このような点から、「これら・それら・あれら」の指示は人指示から事物指示に転成したものであると考えられ、このように指示性質が変化したということは指示語彙の中でも際立った性質を有していると考えられる。

今後はこうした性質が通時的に変化していく過程を詳細に見ていき、現在の「これら・それら・あれら」で表される「指示」と古語の「これら・それら・あれら」の相違を対照していく予定である。

注

- 1) 指示詞複数形の形は「これら・それら・あれら」のほか人に指し示す「こいつら・そいつら・あいつら」の形もあるが、本稿では主に「これ

- ら・それら・あれら」を扱い、「こいつら・そいつら・あいつら」については適宜補う程度とする。
- 2) 実例において || で括られるもののうち、最初に現れるものが実例であり、その後「/」で区切られた後はその語を変えた作例である。
 - 3) ここで「～ら」という接尾辞の性質との関係が疑われるが、その点については4で言及するため、ここでは触れない。
 - 4) ただし、論文など一つ一つの事象に着目し、その全てのものに後接の文がつながる場合は指示詞複数形を用いることが多い。よりの確に表すとすれば指示詞複数形を用いるのが自然であることが多いが、その例の意味をカバーできないわけではない。
 - 5) 明治期以降の小説を中心とした筆者が持つコーパスでは「これら：575例、それら：934例」であったが、ホームページの単語検索を行う google の検索では「これら：約556万例、それら：約223万例」で、明らかな相違が現われた。このような点からも「それら」が小説で多い点が納得できる。
 - 6) 談話管理理論の指示詞研究については金水・田窪 (1992b)、田窪・金水 (1996) 参照。
 - 7) 「あれら」は筆者のコーパスでは22例であったが、google では9810例現われた。この数は注5の「これら・それら」の用例数に比べると圧倒的な差があるが、決して少なくはない。
 - 8) 指示詞そのものは三人称と考えられるが、指示詞が一人称 (自称)、二人称 (対称) を表すこともある。(金井 (2003a, b))
 - (1) (電話で) 「はい、こちらは〇〇商事です」 (自称)
 - (2) 「明日の待ち合わせどうする？」
「そちらにお任せするよ。」 (対称)
 - 9) ここから扱う通事的な問題は現時点では十分な調査を行っていないため、仮説段階に留める。
 - 10) 現時点での調査では『雨月物語』にモノを指し示す用例と人を指し示す用例が両者ともに現われる。ここから論者は近世中期頃から使い分けが起ったのではないかと考えている。

引用用例

- 単行本
 - ・石田衣良『波の上の魔術師』(文芸春秋)・辻仁成『サヨナライツカ』(世界文化社)・藤田直永『愛の領分』(文芸春秋)・村上龍『ラブ&ポップ』(幻冬舎文庫)・吉本ばなな『虹』(幻冬舎)
- 以下の用例は「CD-ROM 版新潮文庫の100冊」より引用

- ・井上靖『あすなろ物語』・北杜夫『楡家の人びと』・太宰治『人間失格』・村上春樹『世界の終わり』とハードボイルド・ワンダーランド
- 以下の用例は「CD-ROM 版新潮文庫の絶版100冊」より引用
 - ・島木健作『生活の探究』
- 以下の用例は「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp>)より引用
 - ・芥川龍之介『蜜柑』、『河童』、『侏儒の言葉』・有島武郎『或る女』(前編)・石原莞爾『最終戦争論』・海野十三『二、〇〇〇年戦争』・岡本かの子『母子叙情』・橋本進吉『古代国語の音韻に就いて』・横光利一『罌粟の中』
- インターネット用例については、検索結果 (yahoo! Japan ; <http://www.yahoo.co.jp/>, google ; <http://www.google.co.jp/>) から引用。URL があるものは、そのページより引用。2004年7月30日に確認。
- 何も表記がないものは作例である。

参考文献

- ・金井勇人 (2003a) 「二人称指示における指示詞「そちら」についての考察～二人称代名詞「あなた」との対照を通して～」(『一橋大学留学生センター紀要』6)
- ・——— (2003b) 「一人称指示における「こちら」の機能と使用条件」(『日本語論学会第6回大会 PROGRAMS&ABSTRACTS』)
- ・金水・木村・田窪 (1989) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4 指示詞』(くろしお出版)
- ・金水敏・田窪行則編 (1992a) 『指示詞 (日本語研究資料集第一期第七巻)』(ひつじ書房)
- ・金水敏・田窪行則 (1992b) 「日本語指示詞研究から／へ」(金水敏・田窪行則編『指示詞 (日本語研究資料集第一期第七巻)』ひつじ書房)
- ・田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」(『認知科学』No3, Vol13)

“*Korera, sorera, arera*”—“the reference” of modern Japanese plural demonstratives

TAKEUCHI, Naoya

This research collects the modern Japanese plural demonstratives “*korera, sorera, arera*”. As for the Japanese demonstrative, it can display plural ones in single several ways, but Japanese plural demonstratives have “individuality”, which keep looking at plural ones, it differs from “totality”, the case which it display at the singular. But the “individuality” is something, which differs from the person to the interpretation, in plural demonstratives it is possible to replace in the singular excluding the case of logical composition. In other words, the reference range of plural demonstratives is quite narrow. In addition, Japanese “*arera*” is thought that it isn’t natural to be used because it has deviated from Japanese demonstrative system, but even today it is used from the translation of English “those”. And that the reference range of plural demonstratives is narrow is thought that is, because that reference keeps turning “the human reference” to “the thing reference”.

(人文科学研究科日本語日本文学専攻 博士後期課程2年)